

膝蓋骨離断性骨軟骨炎に対する自家骨軟骨移植術の1例

○田中 慶尚(たなか よしひさ)(MD), 中川 泰彰(MD), 池永 稔(MD), 山田 茂(MD),
向井 章悟(MD), 向田 征司(MD), 二宮 周三(MD), 坪内 直也(MD)

国立病院機構 京都医療センター 整形外科

【目的】

膝蓋骨の離断性骨軟骨炎に対し自家骨軟骨移植術を行った症例につき、手術の詳細も含めて報告する。

【症例】

13歳、中学2年の男性。主訴は左膝痛。軟式野球を小学4年時からしていた。小学6年時に走っている際に左膝痛が出現した。練習はここ2年間できていなかった。膝の屈曲、伸展時に音がなり、階段昇降時の左膝前面痛を自覚していた。

初診時の理学的所見では、膝の腫脹や可動域制限は認めなかったが、patella compression testが陽性であった。

初診時MRIにて左膝蓋骨外側の骨不整像を認めた。同部位の軟骨下骨はT1、T2強調画像ともに異常信号を呈していた。離断性骨軟骨炎と診断し、初診の10日後に左膝関節鏡および自家骨軟骨移植術を施行した。関節鏡を施行後、膝内側に約7cmの皮切を加え、内側傍膝蓋アプローチにて関節内を展開し、膝蓋骨を90°たてて手術操作を加えた。病巣部から直径8mmの骨軟骨柱を切除し、同側膝の内側非荷重部より直径9mmの骨軟骨柱を採取し病巣部へ移植し、良好な関節面を形成した。

術後2日間ドレーンを留置し、ドレーン抜去の翌日からCPMを開始した。術後2週間の完全免荷を行い、術後3週目から部分荷重を開始し、6週目で全荷重とした。術後2か月でジョギングを許可し、術後3か月で野球復帰許可した。術後5か月の現在、左膝痛は消失し、野球は制限なく行えている。腫脹および可動域制限はなく、patella compression testも陰性となった。ドナー部位による症状も訴えていない。レントゲン上、移植したプラグは骨癒合がみられた。

【結語】

膝蓋骨離断性骨軟骨炎に対し自家骨軟骨移植術を行い、短期での良好な成績が得られた。